
嘆きの声

水城翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘆きの声

【Nコード】

N5354C

【作者名】

水城翼

【あらすじ】

林間学校に来ていた飛鳥蓮あすかれんに、次々に不幸が訪れる。なぜ、こんなことが起こるのか。それは、ある一つの『理由』があったからだっ…。

プロローグ

何が起ったのか分からなかった。

いや、分かっていたはずだ。はつきりと分かっていた。

でも、目の前の現実を信じることができなかった。

信じたくなかった。

まるでスローモーションになったかのように過ぎていく時間。

…実際は、とても早い時間だっただろうけど。

俺には、長すぎた。

この地獄のような時間は。

目の前には親友だったはずの人間。

薄笑いを浮かべて、こちらを見据^{みす}えていた。

俺の瞳には、涙があふれていただろう。

…酷い。

なんで、どうして、こんなことに…。

目の前の親友だったはずの人間がなにかを呟いたように見えた。

なんだ？なにを呟いているんだ？

そう聞く時間は…無かった。

俺は、崖を真つ逆さまに…落ちる。

地面は…見えない。

「うわあああああああああ！！」

さようなら…、みんな。

…さようなら…

プロローグ（後書き）

こんな下手な文章を読んでくれる人がいるなんて…。

ありがとうございますっ！

よければ、感想をもらえるとありがたいです…。

お願いします。

どんな感想でも、もらえたら僕は飛び上がるほど喜びます。絶対。

第一話 始まり

不幸とは無縁だと思っていた。

俺のこの学校生活。

親友だっているし、みんな楽しい奴ばっかだし。

いつだっただろう、この幸せが一転して、不幸のどん底まで突き落とされたのは。

何かが急におかしくなり始めて、歯車が合わなくなる。

やがてぎしぎしと音を立て始め、崩れ落ちたんだ。

何が、歯車をかみ合うのを許さないのだろう。何が、俺達をそうさせてしまったんだろう。

分からない…、分からない。

…林間学校一ヶ月前。

「……………へ？」

「やったな、蓮！お前、自己ベスト更新したんだよ！！」

「…マジ？」

飛鳥蓮。陸上部に所属しているが、自己ベストをさっき更新した…

らしい。

「ホントホント。これで次の大会はお前で決定だな。」

「マジ？」

このとき俺は、かなりの驚きに呆然としていたらしい。
何回も同じ事を聞いていた。

「だからホントだって！ほら、お前からも言っちゃってくれよ。工。^{たくみ}

」

^{さかもとたくみ}
坂元工。俺の一番の親友だ。同じ陸上部に所属しているが、俺より
よっぽど足が速い。…はずなんだけど。

「おめでとう。これでお前は大会に出場できるな。…俺、最近タイ
ム悪いから。あとは頼んだぞ。」

「工…。おう、任されたっ！！」

工が俺の言葉に少し微笑んだ。
そう、工は最近タイムが悪い。もしかしてこれが、スランプという
ものののだろうか。
ということで、今のところ調子が良い俺が選手に選ばれたわけだ。

工と二人で話していたら、ひそひそとした聞き取りにくい声が、少
しだけ伝わってきた。

「…やっぱり天才は違うな…。」

「…二人でトップタイムずっと争って…だろ…？…でも…は、飛鳥
が不正してたんだよな…？」

…。

……え？

俺が、不正？

何でそんな噂、流れてるんだよ…？

陸上部の二人のその言葉に呆然としていた、その時。

第一話 始まり（後書き）

変なところで終わらせてしまっすみません。
こんな文章でも、感想をもらえたらありがたいです。
よろしくお願いします。

第二話 かみしめた幸せ

「はいはい、ストップ。」

啓^{けい}? 何する気だ?

「そーゆーのな、大会に出られないへなちよこが言う負け惜しみっていうんだぞ。そんな恥ずかしい事言ってる暇あるなら、自己練習してたほうがいいと俺は思うけど。」

啓のそのはつきりとした口調に陸上部の二人はぎくり、とした。

「おつ、お前だつて大会に出られないくせに、なに言つてんだよ！」

「俺、別に大会なんて出られなくていいし。ただかつたるいだけだし。それに、君ら俺よりタイム遅いくせに…そんなこと言えると思つてんの? (黒笑)」

「けっ!? 啓っ!? 何言つてんだよ、喧嘩売るな! てゆーか迫力ありすぎて怖すぎだよ。」

…とはさすがに口には出せない。

「「お…覚えてろよー!!!」」

…世間ではこれのことを負け犬の遠吠えって言つんだな…。

「大丈夫だった? 蓮。」

「あ…、ありがとう。啓。」

こいつはもう一人の俺の親友、空知啓。そらちけい

いつも大会には出ないけど、本当はとても足が速いのを俺は知っている。

いつも優しく中立を保っているけど、少し怒るだけで絶対零度の笑みをしてくるので、怖い。

「ほら。工。気付いてたんなら止めなきゃだめだろ。」

「知るか。」

なんかこの二人は仲が悪いみたいだ。顔を合わせるたびに喧嘩している。

特に恐ろしいのが、啓。

いつもの中立の立場はどこへ行っただと思わずつつこみたくなるような…。でも、恐ろしいから絶対にそれは口にしないけど、とにかく啓は工の前ではいつでも絶対零度の笑顔を見せるんだ。

「ま、まあまあ。二人とも、そこまでにしとこう？な？」

「でもなあ、蓮。こいつの顔を見ると思わずぶっ飛ばしたくなる…
「うるせえよ。」

二人がまた言い争いを始める。

もう止めることもできなくなってしまったので、おとなしく見学することにする。

本当は見学なんてしていたらまずいんだと思うけど、あいにく俺はこの恐ろしい喧嘩を止めるほどの勇氣はない。
目の前では、言い争いを続ける二人がいる。

でも、俺は思う。

こんな当たり前の日々が続くのは、どんなにいいことだろうと。
幸せは、いきなりなくなってしまうことを、俺はよく知っていたか

ら。

だから、俺は今の幸せをかみしめる。

もう、二度と幸せを失いたくないから…。

第二話 かみしめた幸せ（後書き）

ここまで読んでくれたかた、どうもありがとうございます!!
よかったら感想をいただけると励みになります。

第三話 噂

幸せは無限ではない。

だからその幸せのありがたさが身にしみて分かるのは、その幸せを失ってしまったとき。

本当に大切なものは、失ってから気付くもの。

俺はそれを知っている。

だから今の幸せを本当に大切にする。

もう幸せを失いたくないから。

いつかその幸せが、不幸になってしまおうとしても…。

…林間学校三週間前。

「順調？」

俺の幼馴染…あさくらみそら朝倉美空が、帰り際に聞いてくる。

「は？何が？」

俺は、何のことか分からないので、そう返した。

「練習よ、陸上の！」

「あー、順調順調。あれつきりタイム下がってないし。」

「え？じゃあ上がったの！？」

「いや、いつもあのタイムだ。」

「落ちてもないし、上がってもいないわけ？」

「ああ。」

そう、俺のタイムはぜんぜん上がらない。ただ、タイムが下がらないことだけが唯一の救いだった。

「がんばりなよ、本当は工が大会に出てた訳なんでしょう？」

「う…ん。まあ、そうだけど。」

俺はあいまいに返す。

思い出してしまった。「俺が、不正をしている。」という噂。

啓は、気にするなと言っていたけど、俺は気になって仕方がない。

「あ、そういえば。」

美空が、何かを思い出したようにいった。

「聞いたよ、あの噂。」

どきり、とした。

まさか美空にまで、あの噂が伝わっているとは思ってもしなかったから。

「あんだ、林間の実行委員、立候補したんだってね。」

「へっ？」

俺の口からは間抜けな声しか出てこなかった…。

「え？違うの？」

「あ、いや、まあそうだけど…。」

美空の口から出た『噂』は、林間学校の実行委員になったことについてだった…。

ほっとした。もうそんなに噂が流れてしまっているのか、と一瞬だけど恐怖を覚えたから。

「ねえ。」

「な、何だよ。」

「なんでそんなに『噂』って言葉に反応するわけ？なんかあった？」

ぎくりとした。今度こそばれてしまいそうな、そんな恐怖。

「ねえ、なんで？まさか、嫌な噂流されたりした？」

「あ、い、いや。そんなことは…。」

「あ、目が泳いだ。」

にやり、と美空が笑う。

「凶星？」

くすくすと美空が笑う。何もかも、見透かした。そんな笑みだった。

「教えなさいよ」

「……………ハイ。」

ああ…、怖い。

俺は美空に、全部話した…。

第三話 噂（後書き）

どうだったでしょうか。

よかったら感想をいただけるとありがたいです。
お願いします。

第四話 仕方のないこと

「…へえ。」

「で、でも俺は何もやっていないんだ!!」

「…ふうん。」

「…なあ、ちゃんと聞いてる？」

「…うん。」

さつきから短い返事しか返ってきてない…。

「だって俺、工が大会に出てくれればそれでよかったんだ。なのに、なんで…こんなことに…。」

「蓮。」

うつむいた俺に向かって、美空は俺に呼びかける。

「分かった。蓮は、何もやってないよね。蓮の言葉、信じるよ。…

もし、その言葉に『嘘』があったら、私は…「おい、お二人さん。

」

「「啓!?!」」

啓が、にこにここと笑いながらやってくる。

「よお、美空、蓮。仲良くやってるか？」

「は?」

「何で？」

「だって、二人とも真剣な顔して話してるんだもん。喧嘩したのかな、って思ってた。」

話していることがこんな内容だけど、啓は微笑んだままだ。

「うん、ちょっと…、いろいろあって。」

「『噂』のこと？」

…！？なんで分かるんだよ！？

「だって、今の深刻な話題って言ったら、やっぱり『噂』のことくらいかな、って思ってた、な。」

俺は、よっぽど驚いた顔をしていたらしい。
啓がそのことを察して説明してくれた。

「だから、気にするなって言ったのに。」

「……だって…。」

俺はつい口ごもってしまった。

「…だって俺、そんなこと一切やっていないのに。なのにありもしない『噂』を流されて。気にしないわけないだろ。」

ようやく言葉が見つかって、理由^{わけ}を話した。

「…仕方ないことだよ、蓮。誰だって、恨んだり、妬んだりすることはあるんだから。」

美空の手が俺の肩に触れる。

仕方ないことなのかな…？

これは、仕方のないことなのかな……？

人の心を傷つけるこの行為は、仕方のないことなのかな………？

第四話 仕方のないこと（後書き）

ここまで読んでくれて、ありがとうございます。

感想、評価、誤字など、何でも良いからもらえたらうれしいです。
お願いします。

第五話 一時の不幸

それは、仲間に裏切られた合図。

それは、仲間が裏切った合図。

それは、希望が失われたときの合図。

それは、自分が嘆く合図。

それは、相手が奇怪な笑い声を上げる合図。

…それは…

絶望の、合図。

「飛鳥君。」

ふいに名前を呼ばれた。

振り返ってみると、そこには宮本^{みやもと}：宮本拓斗^{みやもとたくと}が立っていた。
宮本は勉強家で、いつも三位以内には入っている。

眼鏡をかけ、いかにもまじめそうな格好をしているこいつは、俺が
苦手とする部類の人間だ。

「先生が呼んでいましたが。」

「あ、悪い。サンキューっ。」

「いえ。」

そついうと、さっさとこの場を去ってしまう。

「……………」

「……、あ。そついえば。」

宮本が立ち止まる。

…なんだ…？何だよ、お前みたいな『天才』が、俺に何か用かよ…？

「…、『噂』。聞きましたよ？」

どくん。

心臓が跳ね上がる。

「へえ…、それはどんな『噂』だよ？」

冷静を装って聞いてみる。

しかし、俺の手にはすでに汗がにじんでいる。

「…分かりませんか？ 貴方が、『不正』をしていたという噂ですよ。」

「……………」

彼は帰宅部だ。友達もあまりいそうにない。

なのに…。

もう、そんなにまで『噂』が…！？

「貴方もそういうことをやる人だったんですね。『天才』と謳^{うた}われていた、君が。友人を裏切って。」

どくん…、どくん。

心臓の鼓動が高くなる。

「友人を傷つけて。」

どくん、どくん、どくん…。

どンドン、どンドン高くなっていく心臓の鼓動。

「友人は、貴方のことを信じていたのではないのですか。」

なぜ、こんなにまで宮本に追い詰められなくちゃならないんだ!?

「貴方は、そんな友人の心を「やめろよ」

宮本の言葉をさえぎる、小さいけど鋭い言葉。

俺の、言葉ではなかった。

声がしたほうを見ると、そこには…。

第五話 一時の不幸（後書き）

誤字などありましたら、報告をいただけるとうれしいです。
よろしく願います。

第六話 辛いこと

「工…。」

そこに、工が立っていた。

「俺は、その程度の存在なのか？不正されたくらいで俺はへばらねえよ。…それに、俺の足が遅くなったのは、…ほかに、理由がある。だから、蓮のせいじゃない。」

…理由？

…理由って…、何だよ…？

「…。理由とは、なんですか」

宮本が工を見据えながら言った。

「『帰宅部』のてめえなんか教えてたまるかよ」

工は、見下したような瞳で宮本を見、そして歩き始める。

「行くぞ、蓮」

「っ…、ああ…。」

工は俺の肩を乱暴につかむ。

少し痛みが走ったが、すぐに俺も歩き始める。

「テストの点ごときで、人を傷つけるようなことをするな、宮本。」
「っ!!」

テスト…？

…、そうだ。俺、今回はなぜか調子が良くて、五位に入っただっけ…。

「そのせいで、私は順位が落ちたんですよ…。飛鳥君。」

ぎりっ。

宮本が歯軋りする音が聞こえた。

宮本の拳は強く握られていて、俺への憎しみがとても強いのが分かってしまう。

「…負けないですから」

宮本が口を開くと、そんな言葉が出てきた。

「たとえ、どんな手をおうと…、私は絶対に、負けないですよ。飛鳥君」

そして、睨まれる。

本当に、憎しみに満ち溢れた瞳で。

俺は…、誰にも、そんな瞳で見てほしくなかった。

それが、どんなにつらいことがよく分かっていたから。

だから、とても…

辛かった。

第六話 辛いこと（後書き）

感想、誤字などありましたらよろしくお願いします。

第七話 夢

時々、夢を見る。

あの、恐ろしい光景をはつきりと映し出す。思い出させる。

まるで、俺にそれを忘れさせないために、俺を苦しめるために、…俺に、こんな夢を見せているかのようだった。

その夢を見ると、必ずうなされて目が覚める。

息切れして、体中汗びっしょりの状態で。

いつまで、俺はこんな夢にうなされ続けなくてはならないのだろう。いつまで、俺を苦しめ続けるのか…。

「先生、何の用ですかあ」

教室に行ってみたら、先生はしっかりと椅子に腰掛けていて、資料を見ていた。

一番前の席に、啓が座っていた。こちらに気付くと、にっこりと微笑む。

他にも何人か、よく知っている人が座っている。

…宮本の姿もある。

大体予想がついていたけど、やっぱりこのメンバーって…。

「うん、呼び出すの遅くなってごめんね。林間学校のことなんだけど…。」

やっぱり、林間のことだったか…。

「さ、どこでもいいから座って。」

伊織彩音先生。
いおりあやね

このクラスの担任だ。

外見も中身も若い。

長い髪を後ろに束ねていて、明るい先生。
生徒からも人気だった。

俺は、啓の隣に座る。

「よっ、啓。」

「蓮、お前ちよつと遅れたっばいぞ。」

「やべっ。」

俺は、少し遅れたらしい。

けっこう話が進んでいた。

「…ということで、キャンプファイヤーはこれでよろしいでしょうか。」

宮本が仕切っていく話に、急いで追いつこうとする。

…というか、さっき宮本と会ってからそんなに経ってないのに…。

この事実は、とても早いスピードで話が進んでいることを物語っていた。

啓に教えてもらいながら、話についていく努力をした。

「…で、この役は飛鳥君がやるのがいいと私は思うのですが、どうでしょうか。」

へっ!?

急に自分の名前を出されて、心の中で素っ頓狂な声を出す。

口に出なくて良かった…。

「な、何の役…?」

おそるおそる聞いてみると、宮本の口からは…、

第七話 夢（後書き）

どんな言葉が出てくるんでしょうね…。
まだ僕にも分かりません。（キッパリ。）
感想よろしくお願いします。

第八話 言いたいこと

「登山で、君のクラスの先頭を歩いてもらいたいんだ。」

はっ！！！？？

俺は、よっぽど間抜けな顔をしていたらしい。

宮本があきれたような顔でため息をついて、話し始める。

「あなたのクラスの担任は女性でしょう。なのでこの中で一番体力があると思われるあなたに登山のとき先頭を歩いてもらいたいです。」

はっ！！！？？

俺が！？

「なんで、俺なんだよ。俺より、よっぽど体力がありそうなやつはここににいるのに」

啓を指差しながら、俺は宮本に言う。

「あなたは、大会に出場するほどのかたです。そんなあなたが、この役選ばれないなんて、おかしいでしょう。」

うっ…。

なぜかその言葉が俺をせめているようにしか聞こえなかった。

だってこいつは、俺が『不正』したという『噂』を、知っているから…。

「よろしくお願いできますか？」

宮本が、冷め切った表情で俺に問いかけてくる。

「…っ。」

言いたいことはたくさんあった。

なぜこの場で、『噂』のことを言わないのか。

なぜ、俺をそんな役にたたせるのか。

俺が憎いなら、もっと俺を苦しめるような方法があるはずなのに…。

だけど、先生もいて、俺の友達もたくさんいるこの環境で、それを口にする事など、できなかった。

相変わらず、宮本がその冷め切った表情で俺を見る。

何か、何か答えなきゃ…。

「…、あ、ああ…。分かった…。」

第八話 言いたいこと（後書き）

感想、誤字などありましたら報告をいただけるとありがたいです。
よろしく願います。

第九話 帰り道

幸福の絶頂にいた人間が、不幸のどん底に落とされたとき。

その人間は、いったい何を思うのだろうか。

その人間が、嘆く声を口にしたとき。

その人間は、いったい何を思うのだろうか。

…確実に、思うだろう。

「どうして、こんなことに…、なったのだろうか…？」

啓と二人で歩いていくと、校門に工がいた。

「…終わったのか？」

工が啓をにらみつけながら言った。

…やっぱりこの二人は仲が悪いらしい。

「ああ。終わったけど…それが何か？」

啓も工に絶対零度の笑顔を見せる。

……どうやら、仲が悪い、の一言ですむ仲ではないようだ。

「まさか、俺のこと待っててくれたのか？」

「……………」

聞いてみると、工は無言のまま歩き始める。

「工っ！？待てよ！」

俺も急いで工に追いつこうと走る。

啓も歩き始めるが、工いつも一定の距離をとっている。

と、その時。

「あつれえ？みんなそろって何やってんの？」

美空の声がした。

「げっ」

工がすごく嫌そうな顔をして、美空を見る。

「ちょっと、タク。なんて顔してんのよ！！」

「…………ちつ、何でてめえが、こんなところにいるんだよ」

「部活の帰りだよ。なんか三人とも帰り道っぽかったから話しかけてみただけ。」

にっこりと美空が笑う。

「俺がてめえを嫌がってるの知って話しかけたな、この野郎…！」

工が、震える拳を押さえながら、言った。

…まあ、その怒りに満ち溢れた口調と表情はぜんぜん抑えられていなかったけど。

「あ、バレた？」

けろりとした表情で、美空が言う。

「て、てめえ…!!」

工の言葉に、美空がくすくすと笑う。

「あー、もお。楽しすぎるっ。工をからかうのはっ!!」

「…………だから苦手なんだ、こいつ…」

ちっ。

工の、舌打ちをする音がした。

「で、本題に入るけど。」

その言葉は、美空は工をからかうためだけに来ていたわけではないことが分かった。

「蓮、あのさ……」

ひかえめそうな口調で、美空が語り始める。

「……………え？」

その、美空の言葉は……あまりにも絶望的な言葉だった……。

第九話 帰り道（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

感想、誤字などありましたら、よろしくお願いします。

第十話 情報

「はぁ……」

どうしよう。どうしよう。

こんなにも簡単に、相手の罠にかかっていたなんて…

美空の言葉…本当なのか…？

宮本が…。

蓮の不正の噂を流していたんだって。

蓮を陥れるために…。

それで、蓮を動揺させて、最後には…

最後の言葉は美空の情報が足りなかったらしく、そこまでの情報だったが…。

第一、どこでこんな話を聞いたんだよ。

気になった俺は、電話をかけてみることにした。

ここは俺の自室だ。

俺はベッドに横たわり、ケータイを取り出した。

「おい、美空。さっきの話、本当なのか？」

…、あれ。蓮？どうしたのこんな夜遅く。

美空はこんな夜遅く、という表現をしたが、俺にとっては夜遅くではない。

そのことはつつこまない。人によって感じ方はずいぶん違ってくるのだから。

「ほら、あの話。宮本が噂を流してたって話。」

ああ、あれ？ホントホント。すっかり自分の耳で聞いたんだから。…聞き間違いがなければの話だけど。

…なんかすごく信じたくなってきた。

「その話、誰に聞いたんだよ。」

んー？廊下で偶然。だから嘘かもしれないよー？

おいおい。聞き間違いもなにも、その情報は嘘っぱちかもしれないってことかよ…。

「どんな感じで喋ってた？そいつは男？女？学年は？」

ちょ、ちょっと待って！！いつぺんに聞かないでよ。…まずは、
どんな感じで喋ってたかね。

ちょっと反省。あわてていろいろ聞きすぎた。

大声でもない。でも、こそこそ話してたわけでもないわ。でも、
少し聞き取りにくい声だったかな。

やばい話なら、もっと小声で話すものだ。やはりなにかの勘違いか
…？

性別は男だった。三人で話してたわ。学年は私達と同じみたい。

「…ありがとう。聞きたいことは聞いたから、もう俺寝るわ。おや
すみ。」

あつ！ちょっと待ってよ、蓮。

「…何？」

聞くだけ聞いて、さっさと切っちゃうなんて、不公平だよ。私の
話も聞いて。

「…。悪かったよ。何？」

たまに女は鋭いことを言う。

それはあまりにも納得できてしまい、うんと頷くしかできなくなる。

…、あのだ。

第十話 情報（後書き）

変なところで終わらせてしまつてすみません。

…蓮君は、階段を上っているようなものです。

最終的には、階段は途切れ、落ちていくわけです。

階段を上っていくにつれ、落ちるときの痛みは強まるのです。

なんのために階段を上っていったのか。

絶望に染まる、最期。

それが書きたくて、この物語が生まれました。

なんだか某ゲームの詩に似てますね。

…何が書きたかったか分からなくなってきたので、書きました。ハイ。

感想、誤字などありましたらお願いします。

第十一話 嘘

大丈夫？

一瞬、言葉を失った。

どうして、こんなことを聞くのか、分からなかったからだ。

「な、なんでそんなこと、聞くんだよ。」

結構ショック受けてるだろうと思って。

「だ、大丈夫だよ。全然。」

嘘。

ぎくり、とした。

本心がばれてしまって。とても、とても。

大丈夫なんかじゃないと思うよ。今の蓮の状態。

「……………」

辛いなら、力になるから。じゃあね。

電話が切れた。

俺は、切れたケータイを見つめることしか、できなかった…。

次の日。

「…宮本はさ、最終的に蓮をどんな目にあわせるつもりなんだろうね。」

「ああ。…宮本がなにを考えているかが、分かんないんだよなあ…」

啓が頭をかく動作をする。

「もしかして、『林間学校』が関係あるんじゃないのか？」

工が、ちらりと俺を見ながら言った。

「宮本は、お前に登山のときに先頭を歩かせる役を任せたんだろう？それが何か関係しているんじゃないのか？」

「…そうか？俺は、そうは思わないけど。俺は、もっと他の方法で蓮を陥れていくと思うよ。」

につこりと笑って啓が言う。だが、いつもの如く啓の微笑みは絶対零度だったりする。

「…俺は、俺の考えを述べたまでだ。」

工は、啓を睨みつけて言った。

「…そうか」

啓が言ったその言葉には、なんの感情もこもっていないように聞こえた。

…、しかし。俺には、もっと…こう、なにかとても恐ろしい感情がこもっているかのように聞こえてしまう。
こんなこと、すごく変な感じがするのだが、それでも、俺はそう思う。

この言葉を堺に、俺たちはそれ以上言葉を交わさなかった。

でも…。

このとき俺は気付かなかった。工のことを、とても恐ろしい瞳で見ている人物のことに…。

第十一話 嘘（後書き）

何か作者に言いたいことがあったら、感想をお願いします。

「もっと更新を早くしろ」とか。

きっと、その感想をもらった三日後（遅っ）くらいには次が投稿されてるかと思います。

第十二話 優

落ちていくことは簡単だ。

ただその深く暗い穴に飛び込んでいけばいい。

しかし、上がっていくのは？

どんなに這い上がっても。落ちていく。

どんなに上がっても、上がっても…。

最後には、力尽きて落ちていく。

上がるのは…、難しすぎる。

…林間学校一週間前。

…放課後の部活の途中。ふと、声をかけられる。

「蓮 っ。」

急に視界が真っ暗になる。

「うわっ！」

誰かに目を手でふさがれたらしい。
俺はあわててじたばたする。…間抜けだ。
だが、一向にその手は離れない。

「…だーれだつ。」

「……。優^{ゆう}だろ。手を離せよ。」

視界が明るくなる。

「あ、怒った？ごめんごめん。急にこんな事して。」

「…まあ、いつものことだろ。」

「そつか。じゃあこれからも続けるから。」

「オイ！！！」

こいつは秋津優^{あきつゆう}。同じ陸上部部員だ。

いつもぼーっとしているが、走るときは別だ。とても速い走りを見せてくれる。

こいつはいつも、俺を見つけるとこのような動作をしってくるのだ。

いつものことなのに、引つかかってしまう俺もどうかと思うのだが…。

…まあ、一言で言えば面白いヤツだ。

「で、何の用だよ。」

「あ、うん。僕、蓮に言いたいことがあって。」

にこにこ笑って優が言う。

優は背中の方で組んでいた腕をはなして、俺のほうへ向かわせる。
そして、あっという間に優の手は俺の肩を捕らえる。

第十二話 優（後書き）

かなり微妙なところで終わらせてしまつてすみません（汗）
こんな僕ですが、応援していただけると本当によろしいです！
よろしくお願いします。

第十三話 警告

がしっ…

ものすごく、強い力。

こんなに細い体から、どうしたらこんなに強い力が出てくるかに疑問を抱いたが、そんなことよりも、すごく痛い。

体中に激痛が走り、俺は思わず小さく声を上げる。

「…ケイコク、だよ」

俺の耳元で…、小さく、優がささやく…。

ケイコク…。…警告…？

「…っ、警告…？何のことだよ…？」

「それはね」

優が、そつと俺に言う。

その声色は、とても恐ろしいほどに冷め切っていた。怖い。

どうしてかは分らない。だけど怖い。

そつ…と、優の顔を見てみると…

口元は笑っていた。でも、目は笑ってない…！！！！

優がゆっくりと口を開く。

「林間学校に、行っちゃいけない。」

…え？

「…どうして…？」

「行ったら…確実に…」

そこで優は話すのをやめてしまう。

確実に…何なんだよ…？

どうなるっていうんだよ…？

優の口が開くのをひたすら待つ。

そうしているうちに、俺の体中が汗がびっしょりになっていく…。

気持ち悪い…。はやく、この場が過ぎ去ってしまえばいいのに、と心の底から願う。

「確実に、後悔すると思う。」

…後悔、か…

みんなが林間学校に行っている間、ずっと家あんなところにいたら、それこそ後悔すると思う。

ギシッ…

今までよりも、もっと強い力で肩をつかまれる。

「いつ…！」

「これは警告。聞くか聞かないかは蓮の自由。でもね…。」

ふっ…

一瞬、優が俺の肩をつかむ力をゆるめた。
痛みから解放され、俺は少しほっとする。

しかし、それは本当に一瞬で、すぐにものすごい痛みがおそってくる…。

「聞かないと、確実に後悔するから。」

第十三話 警告（後書き）

久しぶりの「嘆きの声」の更新です。
ここまで辛抱強く待ってくださっていた方、ありがとうございます。
これからも、よろしくお願いします。

第十四話 謎

だんだん…呼吸が荒くなってくる…。

誰か…。誰でも、いいから…。

ここはグラウンドで、今は部活中だ…。

誰かが、見てるはずなんだ…。

部活動をしていないことへの注意だっていい。

お願いだから…。

周りを、見回してみる…。

誰か…、誰か、居ないのか…？

すると…。

誰かがいる、とかそういう問題じゃない。

実際、そんなに近くに人はいなかったけど。

俺達を見ている人は、かなりいたのだ。

しかも、その俺達を見ている人は、ほとんどが笑っている。

思わず自分の目を疑った。
しかし、明らかに笑っている。

…ついに、ストレスで頭がどうかしてしまったのだろうか…

…そんなことはない。明らかに笑っているのだ。嘲笑っているのだ。

俺達のことを？…いいや、『俺の』ことをだ…！！

そう思うと、今までにない恐怖がおそいかかってくる…！！

俺の頭がどうかしていないとすれば、俺が『不正』をしたという噂が流れているせいかな…？

そのことの追い討ちをかけるため、優はこんなことをやっているとも言っているのか？

だとしたら、なぜッ…『こんな形』で…ッ！？

『林間学校』と関係があるって言うのかッ！？

しかも、『警告』…ッ！？どういう意味なんだよ…ッ！？

まさか、『警告』というのは、もう『不正』をするな、という意味なのか…？

じゃあ、『林間学校』ってというのはどういう意味だよッ！？説明がつかないじゃないか…！！

…訳が分からないことをずっと考えていると、急に優の手が俺の肩から離れる。

俺は、痛みから解放される。…よかった。

「…警告…、聞いてくれると、いいな」

優が、ぽつりと言った。

…そのまま、優は歩き出す。

俺は、その優の背中をいつまでも見守っていた…。

第十四話 謎（後書き）

なんだか：ようやくホラーになってきた気がします。

気のせいですね。

まだホラーなんかじゃないですよね。

これからこの作品にホラーを求めないほうがいいです。

ホラーって、僕書いたことなかったんですよ。

なので、こういう話が怖いのか分からないですから…。

感想などありましたらお願いします。

第十五話 家庭の事情

今日は嫌なことだらけだった。

…これから、またその“嫌なこと”があると思うと、

…帰りたいくない。

「…ただいま」

とうとう、家についてしまった…。

家に入り、いつものように玄関の靴を確認する。

…靴が…二人分…ッ!?

俺は嫌な予感がして、すぐに階段を駆け上がる…ッ!!

…しかし…

…林間学校前日。

「蓮。…どうしたんだ、なんか機嫌悪そうな上…、痛々しいんだけど…」

啓が俺のところに来て、俺の頬に貼られたばんそうこうを見て…悲しそうに…言った。

「…っ、なんでもないよ。気にするなよ」

まずい。

さっきのは、明らかに作り笑いだった。

「…元気出せよ」

いつの間にか工もここにいて、俺の頭に手を置いた。

頭にあるたんこぶが見つかったのかと思ったが、工は俺の頭をぐしやぐしやと撫で回す。

…強がっていたのが、ばれたんだな…。

「工は心配性だよなあ。蓮なら大丈夫「お前もだろ、人の事言えねえだろうが」

…久しぶりに見たな…、二人の喧嘩。

相変わらず啓は絶対零度の笑みを炸裂させているし、工はきつい言葉をぶつけている。

…しかし、今はそれも俺を励ましてくれているのだと思うことができ、嬉しくなってくる。

「…二人とも、ありがとう。」

本当に…ありがとう。

「れーんっ！やっ…ほ…」

バシンッ！！と肩を叩かれる。

振り返ってみると、そこには美空がいた。

美空は俺の頬を見て、語尾を小さくしていく。

「おう、美空。」

なるべく平然を装って言った。

だが、美空のその悲しそうな表情は決してなくなるらない。

しだいに…美空の目から…涙が、浮かんでくる。

「み、美空っ！？」

俺はそれを見て慌てるが、美空は俺に背を向ける。

「ご、ごめん。用事思い出したから行くね。」

そう言つて、美空は走り出してしまった。

「…美空」

「…あいつも、つらいだろうな」

「優しいから、あの子。」

そうだろう。

美空は優しい。

優しいゆえに、俺のこの“家庭の事情”は結構こたえているみたいだった…。

第十五話 家庭の事情（後書き）

一気に林間前日まで飛びました、はい。

もう無理です、はい。

ごめんなさい。

林間が書きたくて仕方ありませんです。

こんな僕ですが、最後まで生温かい目で見ていてください…。お願いします。

第十六話 ささやく声

どうして…。

そんなに、悲しい顔をしているんだ？

俺は…ただ、お前達に笑っていてほしいだけなのに。

それだけなのに。

お前達の笑顔を、見ていたいただけなのに。

幸せな…毎日を過ごしたいだけなのに。

どうして…、こんなことに。

…林間学校当日。

…ついに、来てしまった。この日が。

考えに考えた末、やはり林間に行くことにした。

やはり…、家にいるのは、辛い。

だから…。

それに、『警告』の意味も、林間に来れば分かるのだから。

…これが、俺が出した答えだ。

「あーあ、来ちゃったよ。どうするの？」

「…別に、ほっとけばいいじゃないか。」

「でもさあ、そういう訳にもいかないじゃん？…黙ってみていい問題じゃないよ、これは。」

「いいじゃないか、ほうつておけ。」

「でもさあ…。」

「そんなにどうにかしたいなら、お前一人で行けよ。俺だって出来る限りのことはした。」

「ええ、僕う？…やだよ、そっちでなんとかしてよ。」

「嫌だ」

「ちえつ。めんどくさいことになったなあ。」

「それなら、初めからほっとけばいい話じゃないか。」

「…でも、楽しそうじゃん。」

「……ま、それもそう、だな」

「それじゃ、僕はこれからどう話が進むか傍観しにいくね。」

「ああ。」

「じゃあ、……は、どうするの？一緒に見に行く？」

「俺はいい。……、一人で見に行つて来い。」

「分かった。…さすがにやばいと思ったら…止めに入つていい？」

「…好きにしろ。」

「うん。…あ、終わったら報告するね。楽しみにしてなよっつ。」

「ああ、楽しみにしてる。」

第十六話 ささやく声（後書き）

復活しました！！

…復活したのは…いいんですけど…。

まだまともな文章が打てません。

しばらくまた、更新が止まるかも、です。

第十七話 登山

「えー、これから山に登りまーす。」

伊織先生の声が響く。

「せんせえ、もうちょっと教師らしい言い方してください。」

その一言に、どつと笑いがあふれた。

「そこ、うるさいですよー！はい、しゅっぱーっ！ー！」

「せんせえ、もうちょっと教師らしい言い方してください。」

「やっぱりうるさいですよー！さっさといきましょー！」

このやり取りがとても幸せな毎日を再現してくれる。

「じゃ、飛鳥君。よろしくね。」

「ハイ、任せてください。」

「先生は飛鳥君のすぐ後ろでルートの指示するから。安心してね。」

「ハイ。」

登山は順調に過ぎていった。

しかし、それは起こってしまった。

「うわっ!？」

登山後半。

俺は、うっかり木の根に足を引っ掛けて、転んでしまった。

「痛っ…」

別にそれで足をひねってしまった、とか。そういうのではなかった。
“もともとあった傷”に、みごとに木の根が当たってしまったんだ。

「飛鳥君、大丈夫？」

先生が駆け寄ってくる。

幸い、俺が転んで倒れた方向が前だったので、後ろには問題なかったらしい。

「立てる？」

先生に聞かれて、俺は足に力を入れる。

「あー、無理っばいっす。山、降りるんで先行っててください。」
ルートも覚えているから大丈夫だろう。

「いちおう空知君についていってもらいましょう。」

「ほら、蓮。ちょっと道をずれよう。みんなは先にいっててくださーい。」

俺たちは道をずれる。

「……大丈夫か？」

「大丈夫だよ、工。それより俺達の代わりに楽しんできてくれよな」
「……ああ」

工がちらり、と啓をにらんだ気がした。
につこりと啓が微笑む。

工が上へ上って行つたのを見て、俺は啓のほうを改めて見る。

「悪いな、啓。せつかくの登山を邪魔して。」

「いや、いいんだ。」

「……そうか。……お、だいぶ人も少なくなってきたな、そろそろか？」

上に向かっていく人がまばらになってくる。

「なあ、蓮。ちょっといいか？」

「ああ、いいぜ。なんだ？」

「……………」

そう思ったと思うと、啓は口をとじた。

啓の口が開くのを待った。

「…向こうで、話さないか？」

啓が指差した方向は、崖がある方向だった。

「あっちか？」

「そうだ」

「あっちはいつていいのかな、崖だぞ。」

「大丈夫だよ、落ちなきゃいいんだよ、落ちなきゃ。」

「それもそうか」

「ごめんな、どうしても、人に聞かれなくて。」

確かにここだと、体力がない人があとからくる可能性がある。聞かれない話なら仕方がない。

「じゃ、いくか」

「肩貸す。一人で歩けないだろ？」

「おう、サンキュー。」

そして俺たちは、人気のない崖のほうへと歩いていった。

第十七話 登山（後書き）

適当に書きました。

この文章を書いている今、とてつもない後悔を覚えています。
ということ、後で書き直します。
許してください。

次回は自重しませんよ!!

多分きつともうすぐ公開です!!

後悔…しないでくださいね。

（8月1日）

第十八話 …… どうして。

「…で。話って何だよ？」

俺はなるべくがけのほうには近づかないようにしながら啓のほうを振り返った。

「……さえ」

啓が口を開いた。

開いた方がいいが…何と言っているのかよく分からない。

「…？いま、なんて言った？ごめん、聞こえなか…「お前さえッ！
！…！！」

啓の急な大きな罵声に、俺は思わず肩をすくめた。

「…な…ッ」

「お前さえッ！…！！お前さえ、いなければッ！…！！俺は、俺はッ！…！！！」

啓が罵声を俺に浴びせながら、俺の胸倉をつかみかかってくる…！！

「け…いつ、ど…して」

「ははははははははっ！…！とんだ天然野郎だよ、てめえは…！！！！
！…！せっかく優が『警告』を出しているにもかかわらず、俺にのこのこついてくるなんてなあ…！！！！！！」

俺の胸倉をつかんでいた啓の手は、俺の首へと伸びてくる…ッ！

「がッ！！」

ぎり…っ

息が…出来ない。

「警戒心が足りなかったなあ……！……なあ、飛鳥蓮ッ……！……！」

「…どう…して、だよ…ッ、啓…！！」

首にかかる力がだんだん強くなる。

…苦しい…

もちろん、首を絞められていることで息が出来なくて苦しい。

でも、…信じていた、本当に親友だと信じていた人物にこうして裏切られることが一番苦しくてたまらなかった。

信じられなかった

目の前で罵声を浴びせている啓は…偽者ではないのか。

…これは、夢ではないのか。

そう思うと、思わず涙が溢れ出してくる。

「…はぁっ、は…っ、…蓮。これから、お前をこのがけから突き落

とす」

しばらく罵声を浴びせていた啓が呼吸を整えて…俺にこういった。

「…っ!!」

さすがに俺も驚いた。

かといって逃げられない。

足を怪我しているし、啓が俺を押さえつけたままだったからだ。

「…がけの下は、とがった岩だらけなんだ。まえ、ここから落ちた人がいたけど、その人は助からなかったって聞いたことがある。」

…そんな。

「…さよなら、飛鳥蓮。」

いつの間にか、がけのすぐそば。

俺は、啓に押されて、…まっさかさまに…

第十八話 … どうして。(後書き)

お久しぶりですorz

ボツになった話が生き返りました。

ただ単にめんどくさかったからなんですけd(ry

このあたりでやっと半分くらいかな…

疲れました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5354c/>

嘆きの声

2010年10月15日19時26分発行